

重力と虹霓／南波照間島について

実在しない島、「南”波照間島（バイバティローマ）」とはなにか。

日本最南端、沖縄県八重山郡の波照間島がある。

その島の”南”には、果てしなく広がる黒潮の海がある。その遥か向こうに台湾、フィリピン、東南アジア、インドネシアの島々がある。

かつて、黒潮の海流を逆行して、あるはずのない「南波照間島」にたどり着いた波照間島民たちがいた。

なぜ彼／彼女らは幻の島を夢想し、荒波の中へ舟を出したのか。

それは、「人頭税」と呼ばれる、沖縄本島・琉球王府ひいては大和の薩摩藩、日本政府による厳しい税の徴収から逃れるためだった。

彼らは、税の取り立てのために島を訪れた役人の舟を盗み、決死の想いで漕ぐ。

"ここではないどこか”を目指して。

人頭税として島民は、苧麻で織り上げた高貴な布を納めた。

では、島民たちは何を身につけていたのだろうか。

糸芭蕉（バナナの種類）の木の幹を裂き、煮炊きし、糸を紡いで織った芭蕉布だった。

なぜ、彼らは布を織るのに骨の折れる芭蕉布を平服に選んだのか。

身分の違いを示すため。何より、そこに糸芭蕉しかなかったからではないだろうか。

ある日、民藝運動の柳宗悦は、沖縄・八重山を訪れ「皆が揃いも揃って美しい衣を身につけている」と感銘を受け『芭蕉布物語』（1943 年）を著す。

その布の簡素で素朴なさま。必要以上の人間の作為から逃れた、美しさについて。

では、このような美しい光景は、どのようにして創られたのだろうか。

そのような沖縄の工芸の中に潜む歴史背景について、本展では思考を巡らせる。

美しい事物の創造に必ずしも過酷な環境が必要である、とは思わない。

むしろ、そんなことはあってはならないだろう。

それでも、意識下・無意識下にかかわらず、人々の抵抗と無抵抗の形が、そこに美しさとして立ち現れる事実を、どのように思えばいいだろうか。

そして、そのような状況とは、もうすでに過去のもののなのだろうか。

ただ、人々の痛切な生の、その跡をなぞる。

そこに、虹が立ち上がることを願って。

遠藤薫

Gravity and rainbow / About the “Pai-Patiroma” phantom island

What is the non-existent island, "South" Hateruma Island (Pai-Patiroma)?

Hateruma Island in Yaeyama District, Okinawa Prefecture is located at the southernmost tip of Japan.

To the "south" of the island is the endless Kuroshio Sea.

Far beyond are the islands of Taiwan, the Philippines, Southeast Asia, and Indonesia.

Once upon a time, there were Hateruma Islanders who traveled backwards on the Kuroshio current and arrived at "Minami Hateruma Island (Pai-Patiroma)", which should not exist.

Why did they dream of a phantom island and set sail into the rough seas?

This was to avoid the strict collection of taxes by the Okinawa main island, the Ryukyu royal government, Yamato's Satsuma clan, and the Japanese government.

They stole the boat an official of the Ryukyu Dynasty who visited the island to collect taxes.

And rowed the boat desperately.

To “Somewhere not here” .

As a poll tax, the islanders paid a noble cloth woven from ramie.

So what did the islanders wear?

It was a basho (one of the kind of banana) cloth made by splitting the trunk of a banana tree, boiling it, and spinning the threads.

Why did they choose basho for their plain clothes, which is VERY difficult to weave?

As a sign of obedience to the Ryukyu dynasty.

Above all, it must have been because only Ito Basho was left there.

One day, Muneyoshi Yanagi (柳宗悦) , a member of the Mingei (民藝·folk craft) movement in Japan, visited Okinawa and was impressed by the fact that "everyone is wearing beautiful clothes,” and wrote "Bashofu Monogatari" (The Story of Basho fabric. 1943).

The book describes the simple state of Bashofu.

It also talks about beauty, freed from unnecessary human intervention.

Then, how was this beautiful scene created?

This exhibition will make you think about the historical background hidden in such Okinawan crafts.

I don't think that creating “beautiful” things necessarily requires a harsh environment.

Rather, I even think that such a thing must not happen.

Still, whether consciously or unconsciously,

how should we think about how people's forms of resistance and forms of non-resistance appear as "beauty"?

Moreover, can such a situation really be considered a thing of the past?

I just trace the people's poignant lives.

Hoping for a rainbow to rise there.

『**重力と虹霓／南波照間島について**』主な**展示物**一覧

・映像1 《八重山の人々の証言》21分
出演　石垣島のサバニ大工・吉田友厚、吉田の師・新城康弘、西表島の芭蕉布作家・石垣昭子、西表島の猪狩りの猟師、サバニ走者（フーカキサバニ代表）・森洋治、本島の染織工房バナナネシア代表・福島泰弘、八重山（石垣島、西表島、波照間島）の島民みなさん

・映像2 《米軍基地のパラシュートを背負って歩く》6分

・映像3 《制作風景「宙吹ガラス工房・虹」にて》8分

＊

・丸木舟
マルキンニ、と呼ばれる。八重山に残る舟の中でも古い形のもの。

琉球松の一本の木をくり抜いて作られていたものを再現した。

丸木舟は東南アジアやインドネシアにみられる形に近いとされる。

※ 展覧会後は、石垣島の吉田サバニ造船を訪れるとこの丸木舟に乗って、海をクルーズすることができる。

お問合せ先→『吉田サバニ造船(久宇良サバニツアー)』　090-6869-2395

・船の帆
①嘉手納基地黙認耕作地の芭蕉（バナナ的一种）で織ったもの
②1964年の米軍払い下げのパラシュートを再利用したもの
③上記の素材に加え、捨てられそうな芭蕉の古布を継ぎ接ぎにしたもの

・1964年の米軍払い下げのパラシュート
最初の東京オリンピックの年。当時の沖縄はアメリカ統治下にあったが、日本本州の聖火ランナーの第一走者は沖縄の人が選ばれた。動画の中で広げている白いパラシュートも展示。戦後直後はこの白いパラシュートをウィディングドレスに再利用したこともあった。

・写真資料『オリンピック東京大会聖火リレー　久志〜大宜味塩屋　羽地　渡し』1964年　9月　9日（沖縄県公文書館所蔵）

・資料本『美と力：1964 Tokyo Olympics』1964年
読売新聞社

・八重山諸島の島々に流れ着いた種など
柳田國男の『海上の道』は昭和27（1952）年に著される。「日本人が南方から潮流に乗って島伝いに渡来した」という説は必ずしも現在認められてはいないが、日本人や日本の文化における「南方由来」の要素は学問的にも多く指摘されている。

・アカトリ
丸木舟に溜まった海水を掻き出す道具。
民藝運動の柳宗悦もその造形に魅せられ、民芸品として高く評価する。

今回はその木製のものに加え、八重山でみられるクバ製のアカトリも展示。

・エーク（オール）
船を漕ぐ道具。胃腸などにいい木材で作り、非常に削って食べた。今回はテリハボクを使用。

・クバ
クバという植物の葉はあらゆる道具に利用される。会場には海人のクバ傘や扇、アカトリを展示。

・アダン
島中に落ちているアダンの実は、筆になる。
そのほかにも、とある植物の葉っぱに釘で傷をつけることで、戦中・戦後は学校のノートの代わりにしていたそう。

その他、アダンの気根の縄、アダンの葉でできた草履など。

・西表炭坑の石炭
日本政府が取り仕切る炭坑。人頭税だけでなく、炭坑の労働も過酷なものだった。

・珊瑚が石のように丸くなったもの

西表島の長老曰く、戦中戦後に、母親が海辺の石を炊いて出汁を取って食べていたそう。私たちも真似をして飲んでみた。マングローブの生える汽水域は淡水と海水の混ざる場所で、おいしいスーブの味がした。

・波照間島のソテツの澱粉
戦時中に、何日もかけてソテツから毒を抜き、澱粉を取り出して食べていたそう。

戦後もその味が忘れられず、近年まで澱粉を取っていたお爺さまの形見をいただく。

土っぽい澱粉の味。私にはとてもおいしいとは思えないものだった。

島民の中でも、今でも食べたいと思う人と、食べたくないという人がいた。

・種入りのバナナ（糸芭蕉）
バナナには大きくわけて「糸芭蕉」と「花芭蕉」と「実芭蕉」がある。

それぞれ、繊維がとれるもの、花の大きく綺麗なものの、食用にされるものがある。

沖縄や八重山の芭蕉布は特に糸芭蕉を用いる。
バナナは本来種が入っているもので、私たちが食用にしているものは突然変異種のバナナ（実芭蕉）であり、クローンで生産されている。

原産地は、ベトナムと中国の国境あたりである。
現在、日本のバナナ栽培の北限は宮崎県。糸芭蕉は鹿児島県の種子島でも自生しているのを確認。
繊維を採取した。

・台湾の蘭嶼、ベトナムで見つけた糸芭蕉から取り出した繊維

「南波照間島」ではないかと言われている島、台湾南部の蘭嶼にて確保した芭蕉。

糸芭蕉の原産地である中国ベトナム国境の山間で少数民族と見つけ出した糸芭蕉。

ベトナムは安南と呼ばれ、沖縄ニライカナイ信仰の神・ミルク神は安南（ベトナム）からやってきたと言われる。

（柳田國男「みろくの船」『海上の道』所収1951）

西表島は”西が表”と書くことや、竹富島にも西にニイラン石が置かれ、五穀豊穡の神が降り立つ場所と言われる。

これらは、西＝東南アジア、フィリピンからもたらされた文化圏であることを示しているのではない、島民の人は言う。

神は我々に、良きものも悪きものも、あまねく与える。

それらを受け入れる宗教観が、沖縄にはあるそう

だ。

・バラザン（藁算）

琉球王府時代、文字や数を知らない農民たちのために考案された数を数える道具。

人頭税のために、人数を表すのにも使用されたそう

うだ。

・石垣島の鍛冶屋さんからいただいたもの

① 爆弾片（世界大戦の爆弾片を軒下に保管しているお爺お婆が、それらを農道具を作るための鉄資源として、近年も鍛冶屋に持ち込むことがあるそう

だ）

② イノシシ狩りの槍

③ ドラム缶を再利用した糸芭蕉の繊維を取る作業道具

・西表島のヤエヤマヒルギ（マングローブ）の皮木の皮から赤い染料が取れる。古来から舟は、このヤエヤマヒルギで赤く染められたという。海水に浸かると赤く発色する。乱獲のため一時はその数が減り、現在では保護の対象となっている。

沖縄本島の中でも舟造りの地域として知られる糸満では、現在も天竺木綿に赤の染料が用いられている。

・リュウキュウイノシシの血

豚の血は、膠の代わりに帆に塗られていたそう

だ。八重山の在来種で、小型。

他の豚と交配されていないため、サルモネラ菌を持たない。そのために、八重山ではイノシシを生のまま食べることができる。

・血で染めた繊維や芭蕉布

・船の帆の試作

① ヤエヤマヒルギで染めた芭蕉布

② ヒルギで染めた後、リュウキュウイノシシの血を塗った芭蕉布

昔、豚の血を船の帆に塗ったという証言が、八重山ではよくみられる。

本島の琉球漆器にも、膠の代わりに豚の血が用いられることは一般的に知られている。

・紅型（型絵染）

戦後直後の首里では、以前のように糊を置いて天然顔料で染めるのではなく、型紙を芭蕉布に直接あて、米軍の持ち込んだペンキで捺染した型絵染が見られるようになる。

民藝運動の柳宗悦は、これを民藝ではないとした、とされる。（沖縄のコレクター談）

・東南アジア・インドネシアの蚕と、沖縄在来種の蚕

東南アジアの種であるタカセイなどは、沖縄在来種のリュウキュウタサンケンと同じ、黄色。

本州では白か薄緑色が一般である。

バナナの分布や蚕の種類からもわかるように、沖縄・八重山の植生は東南アジアに近い。

・ホーチミンが芭蕉の糸で釣りをする写真

ベトナム（安南）の統治者・ホーチミンの写真。ここで芭蕉は、釣り糸に使用されていた。

芭蕉の繊維は乾燥に弱く、水や湿気に強い。

＊

《火炎瓶／コーラ／沖縄／1945》

《Molotov cocktail / Coke /Okinawa /1945》

『コーラ瓶の再生ガラス』

戦後直後、米兵の捨てたコーラの瓶は真っ二つに切断され、下部はコップとして島中で利用された。

その後、空き瓶は再生ガラスの原料として使用される。

再利用であるが故に、どうしても気泡が入ってしまう。

その欠点をむしろ強みに変えるべく、黒糖や靫殻、魚の骨を混ぜ入れ、泡を意匠として発生させた。

それが昨今の琉球泡ガラスの始まりとされる。

（泡ガラスは琉球ガラスの第一人者であり、「宙吹ガラス工房・虹」の創設者である、稲嶺盛吉が考案したとされる）

『コザ暴動の火炎瓶』

1970年沖縄市、当時のコザ市にて起きたコザ暴動。

米兵が主婦を車両で殺害した事件に、無罪判決が下された。

その判決に対し、沖縄の住民が抗議の意味で投げたのはコーラの火炎瓶だった。

＝「琉球泡ガラスのコカコーラ瓶、その造形には工芸の両儀性が含まれている」

・ガラス作品に混ぜたもの

1945 年製コーラの廃瓶（沖縄本土戦で上陸した米兵が投げ捨てたもの）、読谷の泡盛の廃瓶、燃えた首里城の灰と瓦の漆喰、辺野古の赤土、嘉手納基地の赤土、珊瑚、貝、星砂、黒糖、粉末ウコンなど。

・稲嶺盛吉さんが集めていたコーラ瓶

1988～2000 年のモデル。この瓶に含まれる緑成分が化学変化を起こす色が好ましいということで、特に集められていた。

・コーラの石膏型

琉球ガラスの古典的な技法に、吹きガラスを石膏型で挟んで成形するものがある。現代は少なくなった技術。今回はコーラ瓶を成形するために石膏型を用いた。

・「宙吹ガラス工房・虹」で採取した琉球ガラス片

赤土を用いた土紋や、灰や靫殻、黒糖などをガラスに溶かしこむことで、細かい気泡を発生させるその技法は、稲嶺盛吉の真骨頂。そのガラス片は、何度か再生させることができる。

・陶器手榴弾

終戦近く、日本では鉄不足のため、各地の陶工たちの手で陶器性の手榴弾が制作された。 沖縄戦などでも自決用に手渡された。